



現代政党政治とシュタイン・ロッカンの政治理論： 欧州統合・エコロジー

杉村， 豪一

(Citation)

六甲台論集. 国際協力研究編, 11:27-44

(Issue Date)

2010-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002149>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002149>



現代政党政治とシュタイン・ロツカンの政治理論

—欧州統合・エコロジー—

杉村 豪一

1. はじめに

第二次世界大戦後の経済的発展や、それによる産業構造の変化、また、広域にわたるコミュニケーションネットワークの確立などの進展は、人々を、帰属する特定の集団から離脱させていった¹。これに伴い、政治を規定する主体は社会集団から個人へと代わっていった。

20 世紀後半に起きた政党政治の変容は、こうした変化の中で起こった。以前の政党システムは、労働組合、宗教組織などの支持基盤によって支えられ安定状態にあった。この安定状態は、ロツカンとリブセットが「1960 年代の政党システムは、いくつかの重要な例外を除き 1920 年代のクリーヴィッジ構造を反映したもの」(Lipset and Rokkan 1967:50) であるという「凍結」仮説として指摘したように、少なくとも 1960 年代までの長期にわたり持続されていた。しかしその後、支持集団の絶対性は徐々に失われていった。人々は、自己の価値観や利益にかなった政党を個人として選択するようになっていったのである。こうした中で、政党システムは不安定化していった。政党間勢力の変化や、新興勢力の台頭など、これまで見られることのなかった状況が見られるようになった²。

現実の政党政治の変化に合わせて、その分析枠組みも変化していった。以前は、政党政治分析において、リブセットとロツカンが、『クリーヴィッジ構造、政党システム、有権者の連携』(Lipset and Rokkan 1967) で展開した、「クリーヴィッジ論」に代表されるように、政党の背景にある集団の発生や対立関係を「歴史」的に紐解いていくというアプローチが見られた。こうしたアプローチは、少なくとも政党システムの「凍結」していた、1960 年代までの期間においては強い説明力を擁し、多くの支持を集めていた。しかし、それ以降の時代になると、政党システムに変化が見られるようになり、このアプローチは徐々に支持を失っていった。それに代わり、この変化を説明し得るものとして提出された、イングルハート (1978) の『静かなる革命』の議論のように、統計データなどから個人の価値観を明らかにすることで、「現代」の状況から政治現象を説明するというアプローチが、主要な地位を占めていった。

しかし、たとえこのような新たな分析枠組みが、現代政治に対し多くの重要な示唆を与えている

¹ こうした見方の一例として、ベック (1997:30-48) は通常の近代化の末、自己を近代化する「再帰的近代化」の過程において「個人化」を指摘している。

² こうした変化を示すものとして、宗教投票、階級的投票に減衰したこと、(河田 1988:192-3)、新型政党の参入など政党勢力に変化があったこと (的場 2003) などが示されている。

としても、「現在の個人の価値観などのデータからのみ現代の政党政治は説明可能であり、歴史的視座にはもはや意味はない」と言い切れるのかという点についてなお疑問が残るのではないだろうか。そこで本稿では、「歴史」的視座から政治現象を説明した代表的人物であるシュタイン・ロッカンの理論に改めて注目し、現代における「歴史」的アプローチの有効性を検証してみたい。これは換言すれば、「現代」が「近代」化の末、歴史的文脈から解放されたのか、ということを問うということでもある。

具体的には、現代政治に特徴的なイシューをめぐる各国の状況と、そこに見られる歴史的条件をもとに、「(クリーヴィッジ論を中心とする) ロッカンの理論に現代的な意味を見いだせるか」ということを検討することでこの問いに対する答えを探っていく。その際、本稿では、現代政治のキーワードともいえる欧州統合、エコロジーといったイシューを題材に、この分析を行うこととする。

以下では、まず、「歴史」的アプローチの代表例としてリプセットとロッキンによるクリーヴィッジ論を紹介し、「現代」的アプローチの代表例であるイングルハートの「静かなる革命」の議論と比較することから議論を始める。次に、現代政党政治に特徴的な争点である、欧州統合とエコロジーをめぐる各国の様子を分析する。そして、この結果をロッカンのヨーロッパ概念地図の議論を参照しながら整理し、それを踏まえて、欧州統合とエコロジーという現代的イシューと、クリーヴィッジ論的に示唆されるものとの間に相関関係が見られるか否かを探っていきたい。

なお、本稿では西ヨーロッパの先進諸国のうち、戦後早期から民主主義的政治が存在した 14 カ国（スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド、アイスランド、オランダ、ベルギー、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、イタリア、イギリス、アイルランド）を対象とし、議論を進める。

2. 政党政治の分析枠組みの変遷

2.1 「歴史」的アプローチ：「クリーヴィッジ論」

1960 年代以前の政党政治分析において特筆すべき重要性を持つ研究として、リプセットとロッカンのクリーヴィッジ論がある。ここで言う「クリーヴィッジ」とは政治的対立の背景となる社会的亀裂のことである。クリーヴィッジ論は、社会システム論的枠組みに歴史的視座を導入し、歴史的に形成された各国のクリーヴィッジ構造を分析することで、政党システムを論じたものである。まずは、「歴史」的アプローチの代表例として、この枠組みについて紹介したい。

ロッキンは、リプセットとともに、パーソンズの社会システム論を応用し、政治発展のモデルを展開した。パーソンズのモデルは、A：適応、G：目的達成、I：統合、L：潜在的パターン維持の四要素とその間をつなぐ関係からなる AGIL 図式によって社会システムを表すものである。リプセットとロッキンは、パーソンズの社会システム論における I（統合）のサブシステムとして以下の、小文字で表される各要素からなる agil 図式を提示した（図 1）。この中で、彼らはパーソンズの図式を座標論的に再解釈し、g-l 軸により「中心—周辺」の次元を、a-i 軸により地域横断的な「機能的次元」を表している。そして、これら座標の各端にそれぞれ政体と地域・家庭、経済と文化を配置した。彼らは、この四要素とそれぞれの間の連関からなる政治システムのモデルを、政党システム論の基底とした。

リプセットとロッカンは、このシステム上の各位置に存在する、ヨーロッパに広く一般的に見られる四つのクリーヴィッジを指摘した。このクリーヴィッジは、ヨーロッパの経験した歴史的に重要な変革を契機として顕在化したものであるとされる。この契機には、彼らが国民革命と呼ぶものと産業革命と呼ぶものがある。リプセットとロッカンの指摘する以下のクリーヴィッジのうち、前者の二つが国民革命によるものであり、後者の二つが産業革命によるものである。第一の「支配文化—従属的文化」（中心—周辺）クリーヴィッジは、16世紀から17世紀に起こった宗教改革を契機とする。このクリーヴィッジは、国家中枢からの一国大の国民文化の形成と、それに対抗する従属的周辺部との間の対立関係を表す。第二の「政府—教会」クリーヴィッジは、1789年以降の市民革命を契機とする。このクリーヴィッジは、主に教育を争点とした教会と国民国家の間の対立関係を表す。第三の「第一次産業—第二次産業」（都市—農村）クリーヴィッジは、19世紀の産業革命を契機とする。このクリーヴィッジは農村の利益と工業的利益の対立を表す。産業革命はまた、第四の「労働者—雇用者・所有者」クリーヴィッジとして表される、労働者と雇用者の利害対立も決定的にした。ロシア革命は、この対立の政党政治における性質を確定していった（表1）。

リプセットとロッカンは、ヨーロッパ各国におけるこれらクリーヴィッジの構造のヴァリエーションを分析することで、ヨーロッパの政党政治を説明したのである。

このクリーヴィッジ論は「凍結」状態にあった1960年代までのヨーロッパ各国の政党システムを非常に明確に説明するものであった。そして、この理論により、ヨーロッパの政党政治の多様な形態が体系的に表されたのである。

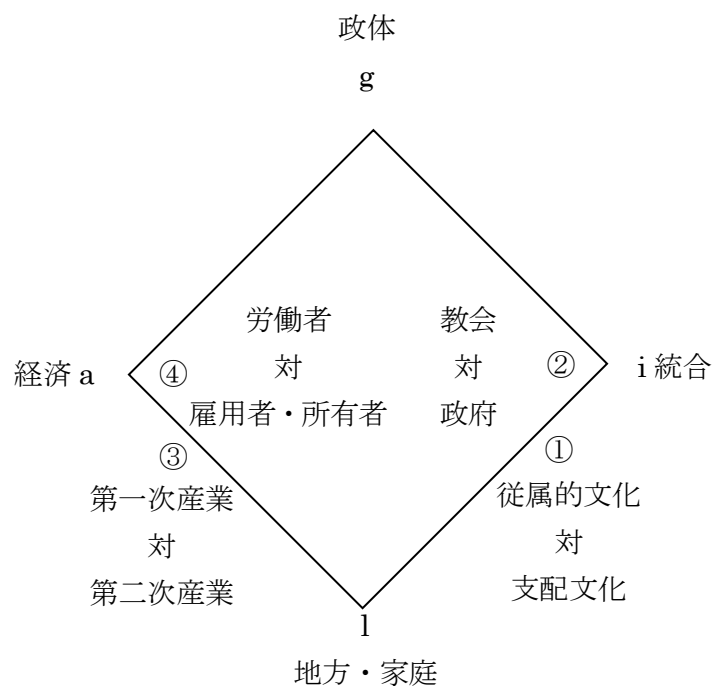


図1 agil図式とクリーヴィッジ (Lipset and Rokkan 1967:14 より)

クリーヴィッジ	重大な転機	イシュー
中心—周辺	宗教改革 16—17c.	国家宗教・国家言語—超国家宗教・ラテン語
政府—教会	国民革命 1789～	大衆教育の世俗的コントロール—宗教的コントロール
農業—工業	産業革命 19c.	農作物に対する関税レベルのコントロール—自由企業
所有者—労働者	ロシア革命 1917	国内政体への統合—国際革命への参加

表 1: クリーヴィッジの歴史的契機 (*ibid.*:47 より)

2.2 「現代」的アプローチ:「静かなる革命」

先述の通り、1970 年代以降になると、政党システムに変化が見られるようになった。この頃を境に、クリーヴィッジ論は、徐々に支持を失っていった。新たな政党政治を説明するために、様々な議論が展開されたが、その中でも、イングルハートの議論は今でもしばしば参照されるものであり、もっとも代表的な一例であるといえよう。そこで次に、ポスト「凍結」期の政党政治の分析枠組として、このイングルハートの議論を紹介しよう³。

イングルハートは、個人の価値観の変容に特に重点を置きながら、分析を行っている。彼によれば、最後の総力戦であった二度の世界大戦が終わり、経済発展や福祉政策によって多くの人が豊かになった現代では、安全や生存といった生理的欲求が満たされ、人々はより高次の欲求、つまり帰属や評価などの自己実現に重きを置くようになったとされる。イングルハートは、前者の生理的欲求を強調する者を「物質主義者」、後者の自己実現的欲求を強調する者を「脱物質主義者」と呼ぶ。その上で、脱物質主義者の増加が、システムレベルでの結果として現代の政治的変容をもたらしているという。イングルハートは、各国の「脱物質主義者」の割合や、彼らの選好を量的に分析することで、現代政治を分析している。環境やジェンダーに関する問題の争点化などは、イングルハートの議論により説明される、典型的政治現象である。

また、イングルハートは、クリーヴィッジについて、(1) 宗教、言語集団の対立などを表す前工業的なもの、(2) 職業、所得など工業的階級対立を表す工業的なもの、(3) 個人レベルでの価値観の対立を表す脱工業的なもの、という 3 つを指摘し、発展論的に整理している (イングルハート 1978:177)。ここで、リプセットとロッキンの議論での第一、第二のクリーヴィッジが (1) の前工業的なものに、第三、第四のクリーヴィッジが (2) の工業的なものに該当することは明らかである。そして、イングルハートの指摘する「脱物質主義」—「物質主義」というクリーヴィッジは、(3) の脱工業的なものとして、リプセットとロッキンの議論を越えた政治発展の段階に据えられている。

以上がイングルハートの議論の概要である。ロッキンの議論での主たる分析単位が社会集団であ

³ 以下のイングルハートの議論は「静かなる革命」の第一章、第二章 (イングルハート 1978:3-69) を参照し要約したものである。

ったのに対し、イングルハートの議論では個人がそれに代わっている。また、それを知る手段として、ロッカンの史的な手法を取っているのに対し、イングルハートは統計的データを用いている。ロッカンのイングルハートが、社会集団が政治的に重要となる「歴史」的社会と、個人が主体化した「現代」的社会という、異なる社会像をそれぞれ想定しているということが、そこからは見て取れよう。

2.3 「歴史」から「現代」への視座の遷移と問題点

しかし、「歴史」から「現在」へ、という分析枠組みの変遷は、いくつかの問題点を伴いながら行われたといえよう。

例えば、「歴史的文脈からの離脱と多様性の排除」は、そのもっとも重要な例といえるのではないだろうか。クリーヴィッジ論は、宗教改革以来の様々な経験の積み重ねの結果として政党政治を捉えている。これに対してイングルハートは、前工業、工業、脱工業という段階的発展の中での、古い状態から新しい状態への推移という近代化論的視座の中で、政党政治を捉えているといえよう。また、その結果としてロッカンは、各対立軸の併存により多様性を持つに至った歴史的な文脈の上にあるものとして、イングルハートらは、社会集団からの離脱と個人化によって同質化した、過去とは一線を隔すものとして、それぞれ現代社会をイメージしているといえよう。

しかし、欧州統合、エコロジーなどに対して好意的態度を示す傾向がある地域がある一方で、そうでない地域があるなど、様々な形態を見せる現代社会に対し、イングルハートらの社会モデルが通用するかどうかという点については疑問が残る。あくまで一つの形態に収斂した同質的、普遍的な社会像を前提とするモデルでは、依然として多様な形態を持つ現代社会を分析することは、難しいのではないだろうか。この問題を解決するために、各地の社会を個別事例として捉える「地域研究」という方法を採用することもできる。だがその場合の分析は、他の地域、そして社会一般との関連を失った断片的なものになってしまうというリスクが伴う。もちろんそれぞれの研究から、多くの成果が得られていることは確かであり、これらの研究はそれとして価値を見出し得るものである。しかしこれらは、そのどちらか一方のみで、社会を詳細かつ明確に捉えられるというようなものではない。そうかと言って、イングルハートらの一般論的に社会を見る研究と、個別に具体的な社会を見る地域研究の二つの潮流が別々に存在するだけでは、この問題の本質的な解決にはならないだろう。

ロッカンの研究は、多様な社会を一般論的な枠組みの中で整理し説明することで、多様性と一般性の両端に触れるものであった。しかし現代政治学は、その両立への志向を弱めてしまっているのではないだろうか。現実に残存し続ける多様性の解釈と、社会とは何かという一般的な問いへの答えとをトレードオフにしている限り、現代の政治研究は、ある種の機能不全から逃れることはできないであろう⁴。こうした問題を持つ現在の政治学に対して、別の視座を示すという意味でも、いま改めて「歴史」的アプローチの有効性を探ることには、一定の意義があるといえるのではないだ

⁴ 1960年代の政治学も行動科学的な一般理論への傾倒から、類似する問題を抱えていた。そしてこれらは、アメリカ的な同質的社会と多数決的な民主主義を最終目標とするというものであり、この問題は「政治」的な意味合いを持つものでもあった。こうした視座が支配的な中で、マイノリティーに目を向け、歴史的な多様性を取り入れたとして、白鳥（1999）はロッカンの欧州の政治学者による研究を評価している。

ろうか。

3. 現代政党政治と「歴史」

3.1 現代政党政治における欧州統合とエコロジー

1970年代頃から、従来の社会集団を支持基盤とする政党政治の衰退とともに、新たな勢力として「新左翼」、「新右翼」と呼ばれる政党の台頭が見られるようになった。また、「環境」や「国際統合」などをめぐって争点が多様化していった。政党政治は新たな局面を迎えたのである。

過去との比較において、「欧州統合」と「エコロジー」は現在非常によく言及されるようになったイシューである。第二次世界大戦後から1974年までと1975年から2003年までの期間について、西ヨーロッパの政党のマニフェストを比較すると、後者の期間において、欧州統合への賛成／反対、エコロジーの推進に言及する割合は前者の期間の2倍以上になっている⁵。このような状況からも、現代政党政治において、「欧州統合」と「エコロジー」は、重要なキーワードとなっているといえよう。

政治的対立や、現状に対する異議申し立てを「紛争」(conflict)と呼ぶならば、欧州統合やエコロジーをめぐる「紛争」は、ヨーロッパの多くの国で見受けられる。しかし、これら「紛争」をめぐる状況は、経済的、政治的に先進的な発展を遂げ、比較的均一な社会を持つ西ヨーロッパ各国においてでさえ、様々である。これは、同質な社会を想定する「現代」的アプローチの限界を、暗に示しているのではないだろうか。そこで、本研究では、現代の政党政治の特徴を表すものとして、この欧州統合とエコロジーをめぐる「紛争」という点に注目し、現代の政党政治を見ていくこととする。その際、本稿では、政党のマニフェストを用いて、これら「紛争」を指標化したい。そこに記される主張は、必然的にその国で論争となっていることをよく表していると考えられるからである。具体的には、政党のマニフェストにおける欧州統合とエコロジーに関する文言の占有率により、これらを測ることとする。ただしここで、「政党」と一口に言っても二大政党の一翼を担うようなものから、一議席の保有を争っているものまで、様々な規模のものがあるので、それを考慮して得票率を加味することとする。つまり、各国の〈欧州統合（またはエコロジー）をめぐる「紛争」の強さ〉を〈マニフェストにおける欧州統合（またはエコロジー）に関する文言の占有率〉と〈得票率〉の積の全政党にわたる総和として定義し、それを1975年から2003年の平均を取ることで指標化するのである。この方法によって各国の欧州統合とエコロジーをめぐる「紛争」の強さを調べると、図2、図3、図4がそれぞれ得られる。

これを見ると、まず、欧州統合に賛成する主張が最も多いのは、ドイツであり、以下、ベルギー、オランダ、フランス、イタリアと続いているということがわかる。地理的にこれらの国々は近い地域にあり、ヨーロッパの大陸部に一つのクラスターをなしているといえよう。次に、欧州統合に反対する主張に関しては、イギリス、アイスランド、デンマークで特に多く、以下、スイス、フランスと続いているということがわかる。前者の3カ国は、大陸から離れた離島、ないしは海に張り出した半島に存在する国であり、ここにも地理的特徴が見て取れる。最後に、エコロジーに関する主

⁵ マニフェスト分析のデータについては、Budge, et al. 2001 と Klingemann, et al. 2006 を用いた。

張については、スウェーデン、フィンランド、ノルウェーといったスカンディナヴィア半島の国々で多く、以下、ドイツ、スイスがそれに続いている。これらの国々は比較的に西ヨーロッパの北東部から中心部にかけて固まっているといえよう。このように、各「紛争」が強い国は、特定の地域に集中する傾向にある。こうした〈地域的まとまり〉の存在は、本稿で焦点となる「歴史」に関して、何かしらの示唆を与え得るものなのだろうか。

こうした議論を踏まえて、次に、現代政治をめぐる「紛争」と「歴史」との相関について考えていくこととする。

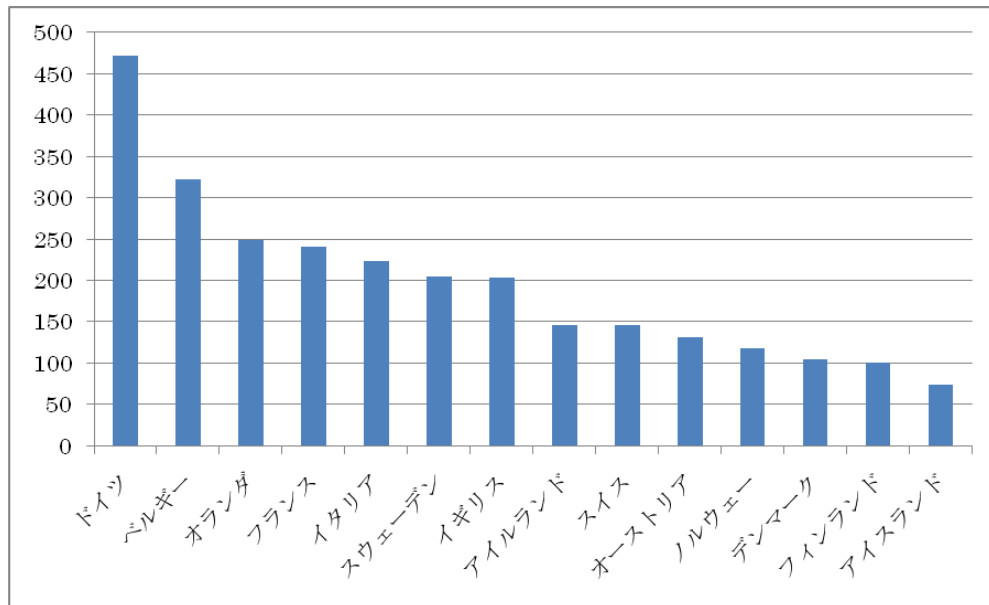


図 2 欧州統合⁶

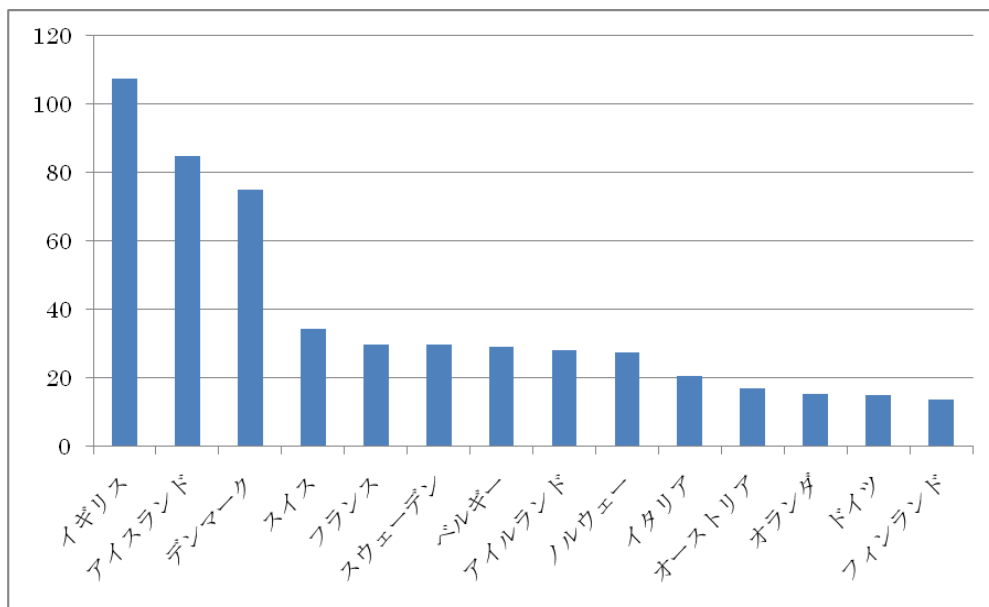


図 3 反欧州統合⁷

⁶ 筆者作成（同文献の European Integration: Positive のデータを用いて計算しグラフ化した）。

⁷ 筆者作成（同文献の European Integration: Negative のデータを用いて計算しグラフ化した）。

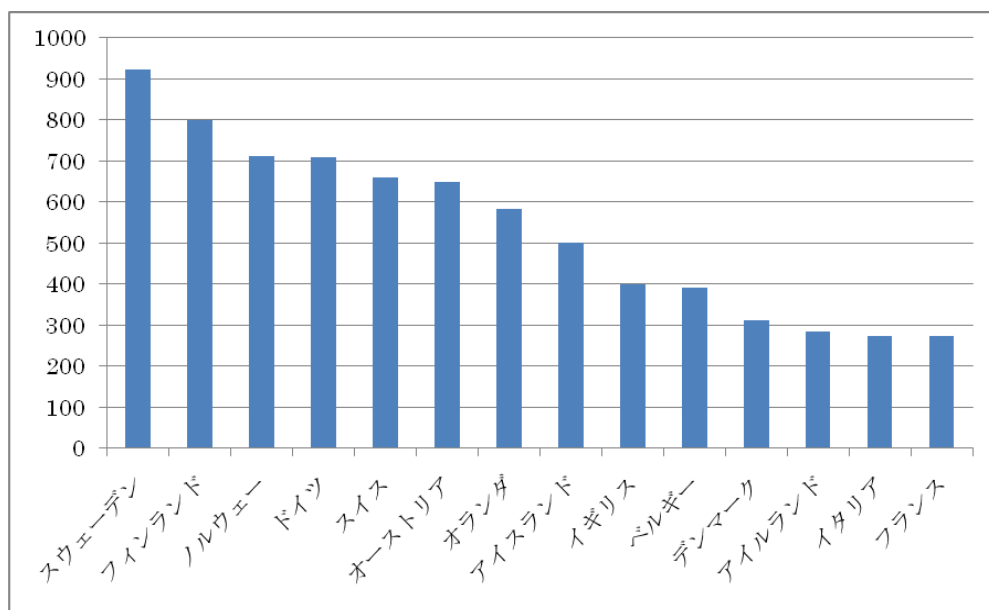


図 4 エコロジ―8

3.2 現代政治とヨーロッパ概念地図

以降の議論では、「歴史」的アプローチをとるロッカンの政治理論の現代政治における可能性を検証するため、現代政治に特徴的な欧州統合、エコロジ―という要素と、「歴史」との関係を探っていく。そのために、まずはこれらの要素をめぐる「紛争」の特に強い国に見られる歴史的な共通項を探っていきたい。ヨーロッパ各国の歴史についての政治学的枠組みとして代表的なものに、ロッカンの「ヨーロッパ概念地図」⁹がある（図 5）。本節では、この枠組みに沿って、ヨーロッパの歴史について考えていきたい。

ヨーロッパ概念地図の議論を始めるにあたり、ロクkanはパーソンズ社会発展論を援用している。それによれば、原始的な社会は、社会発展とともに、「軍事・行政」、「経済」、「文化」などの社会機能を、未分化の状態から次第に分化させていくという。ヨーロッパでは、まずローマ帝国期に、この「軍事・行政」、「経済」、「文化」という社会機能に、それぞれ異なるエリートを配しての体系化が行われた。ローマ帝国が崩壊した後、ヨーロッパはその「軍事・行政」的支配からは解放された。しかし、「経済」、「文化」という社会機能については、ローマ帝国期の汎ヨーロッパ的なシステムを継承したものが残り、以降のヨーロッパ世界に、多大な影響を及ぼしたという。後のヨーロッパを考える上で、重要となったこのローマ帝国期からの「遺産」とはすなわち、ローマを中心とするカトリック教会と、中央交易帯と呼ばれる、北イタリアからライン川沿いを下りバルト海沿岸のハンザ同盟に至る、ヨーロッパの中核として栄えた都市網のあった地域のことを指す。ローマからの距離を表す「南北」軸と、中央交易帯からの距離を表す「東西」軸とにより、これらの影響力の強さを表すことで、ヨーロッパの地政学的性質を表した抽象的な地図が、「ヨーロッパ概念地図」である。

さて、後に起こる国家形成において、カトリック教会の勢力は、ネーション形成の状況に影響を

⁸ 筆者作成（同文献の Environmental Protection: Positive のデータを用いて計算しグラフ化した）。

⁹ ヨーロッパ概念地図の議論は、Rokkan 1973 や Rokkan 1975 において展開されている。以下のヨーロッパ概念地図の議論では、篠原（2007:190-5）による、解釈を加えたロッカンの議論の説明に多くを依拠した。

及ぼしたとされる。「南北」軸上、ローマに近いヨーロッパ「南部」では、「文化」に関する社会機能に対し、カトリック勢力が強い影響力を持っていた。国内各地が、こうした汎ヨーロッパの体系の影響下にある中でアイデンティティ統合は難航し、ネーション形成は緩慢であったという。それに対して、比較的カトリック勢力の影響力が弱かった「北部」では、宗教改革が進んだ。国家はカトリック教会に代えて国教会を国内に配置し、ラテン語を自国語に置き換え、言語を標準化していった。こうした「文化」機能の統合により、プロテスタント諸国では、比較的に容易に早期のネーション形成が可能であったという。

他方、「東西」軸上の座標は、後のステイト形成を規定したとされる。広大な領域を囲う近代国家は、中央交易帯から遠く、ヨーロッパの中では「辺境」と見なされていた地域の中から、まず臨海地域で、次いで内陸地域で形成されたという。これは、突出した勢力を持つ単一勢力が出現し、その勢力からの支配により、広大な領域の統合が可能だったためである。対照的に、かつてヨーロッパの中核とされた中央交易帯内では、近代的国家形成は遅れた。これは、都市間勢力の拮抗状態が長く続き、また、周囲に後背地がなかったためである。

さらに、中央交易帯を挟んで西側に広がる臨海地域と、東側に広がる内陸地域との経済資源の状況も、そこに重要な差異を与えたものとして指摘されている。外的資源が豊富な臨海部では、貨幣経済の発展がみられた。臨海部において、統合の中心となる勢力は、この貨幣経済からの余剰を動員することで、勢力を強めていった。それに対し、外的資源の制限された内陸部では、このような経済的発展は乏しく、中心による資源動員は、主に、農業的労働力の余剰に依存するものであったと言われている。

以上が「ヨーロッパ概念地図」の概要である。前節で得られた結果を、この枠組みを参照し整理すると、欧州統合をめぐる「紛争」は、(1) 賛成するものに関しては中央交易帯上で強い。(2) 反対するものに関しては、中央交易帯外、臨海地域で強い。また、(3) エコロジーに関する「紛争」は、プロテスタント地域、内陸地域で強い、という傾向の存在が分かる。

	臨海部	中央交易帯	内陸部
プロテスタント	アイスランド、 <u>ノルウェー</u> 、デンマーク、イギリス	<u>ハンザ同盟</u>	<u>スウェーデン</u> 、 <u>フィンランド</u> 、 <u>プロシア</u>
混合		<u>オランダ</u> 、 <u>ラインラント</u> 、 <u>スイス</u>	
カトリック	アイルランド、 <u>フランス</u>	<u>ベルギー</u> 、 <u>イタリア</u>	オーストリア

図 5 ヨーロッパ概念地図の一例 (Flora et al. 1999:142 を参照し作成した) ¹⁰

¹⁰ いくつかの地域において領域統合が独立的に進展したドイツは、ハンザ同盟、プロシア、ラインラントという各地域の旧名称のまま示している。また、ここでは本稿の議論に必要な要素のみを抜き取り、簡略化している。なお、各「紛争」の強い国には強調を加えた。太字は欧州統合をめぐる「紛争」のうち賛成するものが強い国、斜体は、反対するものが強い国、下線はエコロジーをめぐる「紛争」が強い国の上位5カ国をそれぞれ示す。

3.3 国家形成の諸次元とその発展

ヨーロッパ各国の国家形成は、その地理的配置によって規定される様々な歴史的条件を背景にしたものであった。そして、現代政党政治における欧州統合やエコロジーといった「紛争」の特に強い国の間に、この過程における特定の歴史的共通項が見られるということが、前節における指摘である。しかし、国家形成期というはるか昔の歴史的条件は、政党政治にどのように関わってくるのだろうか。この節では、こうした問題を考えるために、まず、国家形成期から現代に至るまでの、さらにマクロなタイムスケールでの政治発展の流れを追うことから、議論を始めたい。ここで、この過程におけるヨーロッパの各地の状況について、比較可能な枠組みの中で体系化したロッカンの『国民国家形成の諸次元』（Rokkan 1975）についての考察を、本稿では援用したい。

ロッカンは、多様な政治発展を説明するため、パーソンズの社会発展論に、中心—周辺論的解釈を加え、図 6 の八面体からなるモデルを提示している。このモデルは、政治発展における「武力」、「経済」、「文化」、「法」という諸機能の分化を通して行われる、中心による周辺の統合という政治システムの一般的形を表すものである。ロッカンは、このモデルを基礎に、政治システムの段階的発展論を展開する。

ロッカンによれば、政治システムは、「浸透」、「標準化」、「参加」、「分配」という 4 つの段階を経て発展するという。「浸透」とは、ステイト形成の過程である。エリートレベルの政治、経済、文化的の統合、諸機関の設立がこの段階で行われる。「標準化」とは、大衆がシステムに組み込まれる過程である。徴兵制、義務教育、マスメディアによりアイデンティティ形成がこの段階で行われる。

「参加」とは、大衆の政治参加が増大する過程である。反対意見の権利の確立、有権者の拡大、政党の形成がこの段階で行われる。「再分配」とは再分配のための機関、公共福祉サービス、累進課税など、平等のための国家政策の発展と、そのための行政機能が增大する過程である。これらの局面は、それぞれ「武力」、「経済」、「文化」、「法」における中心から周辺へ（浸透、標準化）、また周辺から中心へ（参加、再分配）という相互作用により生じるものである。政治システムの発展のためには、これらに対応し、両者を再び安定的関係の下に包摂していくことが求められる。政治システムは、これら発展段階の克服を経て、完成に向かっていくという。

なお、ロッカンは、領域的政治システムの形成過程を説明するために、ハーシュマンの『退出・発言・忠誠』（Hirschman 1970）の議論をパーソンズの社会発展論と関係付けて援用している。国家は、国境横断的交流に厳しい制約を課すと同時に、対内的には集権化と標準化を通じて内的障壁の消滅を促すことで、均質的空間支配を作り出した。これにより、政治的反对者の「退出」を困難にし、対照的にシステム内での「発言」を容易にした、というのである（島田 2006:25）。こうした努力を経て国家は、「ヨーロッパ」から国境線にそって一定の領域を切り取り、独自のシステムを形成した。そしてこれによって、さらに次の段階での、民主政治の発展へ向けた土台できたのである。

以上がロッカンの議論の要点である。これに対し、ロッカンの共同研究者でもあるフローラは、ロッカンの指摘した四つの発展段階をそれぞれ、（狭義の）国家形成、国民形成、民主化、福祉国家の確立に相当するものとしている（Flora et al. 1999:14）。またフローラは、12 世紀から 20 世紀までにヨーロッパに現れた国家システムは、ローマ帝国期による「軍事・行政」、「経済」、「文化」次元からなるシステムの拡張の後に中世において起きた領土縮小の結果であるとするロッカンのマク

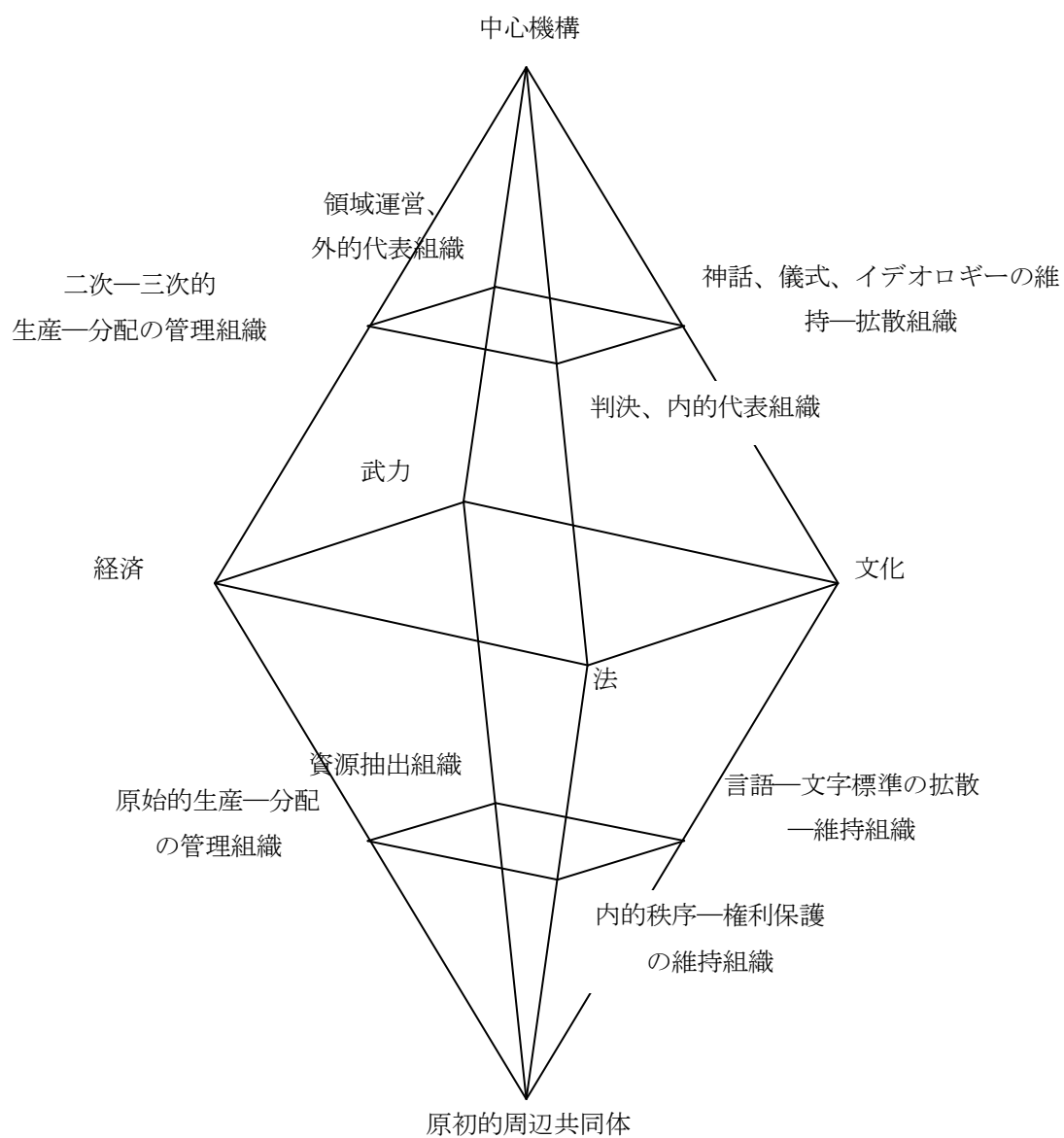


図 6 諸次元の基本格子 (Rokkan 1975:566 より)

ロ・ヨーロッパモデルを前提に、ロッカンの一連の研究を体系化して捉え、政治発展の過程を、(狭義の) 国家形成から、国民形成、大衆デモクラシーを経て福祉国家に至るものとして具体的に検証している(フローラ 1985)。ここで、フローラはまず、ロッカンの一連の議論を用いて、各過程に対する理論的フレームワークを整理しているが、この議論を見るとロッカンの様々な理論の関係性が浮き彫りになる。ヨーロッパ概念地図において、中央交易帯との位置関係によって異なる時期と形で国家が形成され、カトリック教会の影響力の強さによって異なるネーション形成がなされたということを述べたが、これは、(狭義の) 国家形成、国民形成の段階に対応する。そして、その後の、民主化(大衆デモクラシー)の段階こそが、政党システムの形成の行われた段階だと考えられる。そしてクリーヴィッジ論は、この段階における、各国の様々な状態を具体的に説明したものである。

こうした議論により示される、連続的つながりを持つという段階的政治発展の性質からは、クリーヴィッジ論の描く政党システム形成における状況が、ヨーロッパ概念地図によって示される国家形成、国民形成の状況に依存しているということが示唆されよう。このことは、クリーヴィッジを生成する agil 図式の空間において、経済、文化という機能次元と、中心一周辺関係を表す次元が、ヨーロッパ概念地図で示される、経済的性質(臨海―内陸)、文化的性質(プロテスタント―カトリック)、領域形成(中央交易帯)の性質に関連するものとなっていることから明らかである。ロッカンの政治システムのモデル(図 6)は、こうした関係性を、その内に包括したものとなっている。このモデルは、ヨーロッパ概念地図の始点となったパーソンズの社会発展論と、クリーヴィッジ論の始点となった agil 図式で表される社会システム論を融合させることで形成されている。八面体をなすこのモデルにおいて、「軍事・行政」、「経済」、「文化」、「法」という平面は、社会発展論の空間を、「経済」、「中心」、「文化」、「周辺」という平面は agil 図式の空間を、それぞれ表しているのである(白鳥 2002:272)。

以上のことからわかるように、ロッカンのモデルは、歴史の各段階の影響を受け次の段階に進むという連鎖の作りだしたシステムの総体を示すものである。概念地図から、クリーヴィッジ論へ至る経路もこのモデルの構造から示唆され得るといえよう。そこで、これまでの議論を踏まえて、ロッカンの一連の理論から、歴史的条件との連関で現代政党政治について考察を試みたい。具体的には、現代政党政治における欧州統合、エコロジーについて、概念地図の示す歴史的条件からクリーヴィッジ論的な分析に議論を進めることでこれを行う。ここで、クリーヴィッジ論により示唆される特定の社会的性質と、現代政党政治における「紛争」との間に相関関係が見られるのならば、現代政治分析における「歴史」的アプローチ、ひいてはその源泉となる「歴史」的なパースペクティヴ自体に対し、積極的な評価を下すことができるといえるだろう。

3.4 現代政治とロッカンの政治理論

これまでの議論で、欧州統合、エコロジーをめぐる「紛争」は、ヨーロッパ概念地図における中央交易帯、臨海―内陸、プロテスタント―カトリックという要素において、特定の共通点を持つ地域で強いということが分かっていた。以下では、こうした歴史的条件を起点として、クリーヴィッジ論を用いた「歴史」的アプローチによる考察を進める。

初めに、欧州統合について考えていきたい。欧州統合については、まず、ヨーロッパ概念地図で

は、中央交易帯に対する配置によって決まる歴史的條件が賛否に関係していた。この條件は、国家形成の性質を左右するものであった。これは、政治システム内の中心による周辺の凝集力に関係するといえるのではないだろうか。突出した勢力による周辺の排他的統合により、早期の領域統合が行われた中央交易帯外では、典型的中心—周辺構造を持つ、大規模で安定的な領域的政治システムの形成に成功するものが多かった。例えば、中央交易帯の外に位置するイギリスでは、ロンドンを中心とする勢力により、安定的な周辺統治が成し遂げられた。また、フランスでは、中央交易帯に隣接するという地理的配置から、その接線からの退出可能性に対抗すべく、それは、より中心集権的形で行われたといわれている（篠原 2007:195）。対照的に、こうした統合の核となるような勢力が台頭せず、都市勢力間の均衡が長らく続いた中央交易帯内の地域では、強固な中心—周辺構造を持つ領域的統合の形成は困難であった。中央交易帯では、統合中心が、領域内を安定的な中心—周辺関係の下に収めるには諸勢力に対し勢力が十分でなかったり、また、諸勢力の緩やかな連帯を発展させた形での統合が行われたりした。例えばドイツは、辺境のベルリンを中心とするプロイセンが、先進的なライン川周辺の中規模都市群を取り込んでいくことで形成されたため、中枢の脆弱さから、この諸次元におけるこの統合は困難となり、これによる政治的不安定は結果としてファシズムを招いた。またオランダやスイスでは、中央交易帯の中では比較的早期から国家が成立していたが、それは都市同盟を礎にする複数勢力による権力共有を基調としたものとなった（島田 2006:24）。

先述の政治システムにおける配置から、こうした差異は agil 図式の空間の中心—周辺構造に関係するものであるといえよう。そしてこれは、一例として政党システムの多元性に関するクリーヴィッジ論的性質を規定する要因となっているのではないだろうか。中央交易帯外では、イギリスの労働党対保守党、オーストリアの社会民主党対オーストリア人民党のように一国大化した少数の勢力による対立構造がしばしば見られる。それに対し、中央交易帯では、比例代表制を代表選出方法とする多極共存的な政党政治の形態がしばしば見受けられる。この地域のクリーヴィッジ構造は、柱状化し、勢力分散的なものとなる傾向にあるといえよう。

以上のように、欧州統合に対して、賛成する国は、分散的な中心—周辺性を背景とした多元的な政党システムを持ち、反対するものは強い中心—周辺性を背景とした、より集権的な政党システムを持つという特定のクリーヴィッジ論的性質を持つ傾向があるのである。

また、欧州統合に反対するものについては、中央交易帯外でも臨海部に多かった。この地域は、「豊富な外的資源を持つ」という地政学的特徴を持っていたが、この背景には、海運による経済領域における領域外に広がりを持つシステムとの接合が関係するといえよう¹¹。これは、臨海部の政治システムが、領域外への退出経路、つまり経済的開放性を持っているということを意味するものである¹²。こうした性質を持つ臨海部において、発展した貨幣経済、そして強力な都市勢力による基盤は存在した（フローラ 1985:15）。こうした経済的地理的特性は、クリーヴィッジ構造を考える上での、非常に重要な特徴となるといえよう。これらは、agil 図式的空間では経済に関する領域に関係するものであるが、この領域にある「労働者—雇用者・所有者」、「一次産業—二次産業」（都市

¹¹ ロッカンは、16世紀から17世紀の国境の画定による文化、軍事・行政次元での縮小とは対照的に領土を越えた拡大を見せた世界（大西洋）資本主義の存在に言及している（フローラ 1985:13）。フローラも述べるように、こうした領域を超えた経済システムについては、世界規模での経済システムに言及したウォーラー・スタインの「世界システム論」の指摘するものでもある。

¹² こうした東西での経済的退出可能性の差異は、ロッカンのように体系的に示されている。（Rokkan 1974:47）

—農村）といったクリーヴィッジは、各アクターの勢力関係や対立の性質という点で、貨幣、都市といった要素の影響を回避しえない。貨幣経済の発展は、労働者と資本家の双方を作り出す資本主義に、都市の発展は都市—農村という両主体間の勢力関係自体に、強く影響するものだからである。このように、欧州統合に反対するものには、経済領域におけるクリーヴィッジ構造に、発展した貨幣経済や都市を背景とするということに起因する固有の特徴があるのである。

次に、エコロジーについても、同様に考えていこう。エコロジーをめぐる「紛争」の強い国は、内陸部に多かった。この要素は、先の臨海部の経済状況とは対照的に「制限された外的資源」という特徴を意味するものであった。これは、政治システムにおける経済領域での外部との乖離を背景とするものである。そして、これは市場経済の発展度という意味において、後の社会の性質を決定づける要因となったといえよう。

政治システム上にこうした経済的閉鎖性を持つ地域では、近代的貨幣経済や都市勢力の発展は遅れ、これらに変わり、農業的な労働力による余剰資源と、強力な農村勢力による基盤が重要なものとなった（フローラ 1985:15）。この経済的地理的特性は、経済領域のクリーヴィッジ構造を考える上で、やはり重要である。これらは、労働者—雇業者・所有者、都市—農村関係に対して、臨海部とは対照的な影響を与えるものと考えられる。こうしたことから、エコロジーをめぐる「紛争」が強い国には、経済領域でのクリーヴィッジ構造に、やはり固有の特徴があるのといえよう。

また、エコロジーをめぐる「紛争」には、「プロテスタント」という要素も関係していた。これはネーション形成の性質を規定するものであった。プロテスタント化は、汎ヨーロッパ的なカトリックの体系からの離脱を意味する。そして、プロテスタント地域では、自国語の普及などにより、政治システムからの文化的退出に対する障壁が高められ、一国領域内での文化統合が推進されたのである¹³。

こうした政治システムの性質は、agil 図式的空間では文化の領域に関わるものであり、この領域の、「政府—教会」、「支配的文化—従属的文化」クリーヴィッジの構造を考える上で重要なものとなる。「政府—教会」クリーヴィッジは、政府からの文化統合と、それに抵抗する教会勢力の対立を表すものである。ここでの両主体の性質や、その間の勢力関係は、こうした性質に依存しているといえよう。例えば、南部／北部における強いカトリック勢力の存在／不在は、この性質を端的に表すものである。「支配的文化—従属的文化」クリーヴィッジは、国家中心による文化統合に対する周辺の抵抗を意味するものであるが、支配文化の影響力やその性質、それに対する従属文化の抵抗の強さにもプロテスタント地域とカトリック地域とで差異があるといえよう。言語的境界線に沿い、大規模で激しいものとなっているスペインのカタルーニャ、バスク対マドリード、ベルギーのフランス語圏対オランダ語圏といったカトリック地域での対立に、こうした構造的性質の影響一端を見出すこともできよう。こうしたことから、文化領域におけるプロテスタント地域のクリーヴィッジ構造は、カトリック地域とは異なる性質を持つものであるといえよう。

以上のように、特定の現代政党政治における「紛争」は、ある特定のクリーヴィッジ論的特徴を示す地域で強いということが分かる。このことはクリーヴィッジ論と今日の政党政治との間に、一定の関係性があることを示しているといえよう。以上のことからすれば、クリーヴィッジ論、そし

¹³ こうした南北での文化的退出可能性の差異についても同様に示されている。

てその形成に至るまでの歴史的過程を体系化した一連のロッカンの政治理論は、現代政党政治においてなお意味を持ち得るということがいえるのではないだろうか。

4. まとめ

本稿では、「現在」における個人の価値観や行動に注目し、主として統計的なデータを用いて分析を行うという、「現代」的アプローチが主流となった今日において、社会構造や文化を歴史的に分析していくという「歴史」的アプローチが意味を持ち得るのかという点について、ロッカンの政治理論に注目し議論を行ってきた。まず、現代政党政治のキーワードの一つともいえる欧州統合とエコロジーについて各国での状況を調べ、そして、各国間のこれら「紛争」をめぐる状況を、ヨーロッパ概念地図やクリーヴィッジ論を通して分析した。この結果、欧州統合、エコロジーという現代的なイシューをめぐる多様性と、ロッカンの理論によって示唆されるものとの間には、相関関係が見られた。

本稿で展開したこのような議論により、個人が自己の価値観や判断によって政治的行動を決定するようになったと言われている今日においても、ヨーロッパ概念地図やクリーヴィッジ論といった社会を歴史から分析するというアプローチは、今もなお政治分析、社会分析に対する有効性を秘めているといえるのではないだろうか。

「凍結」後の世界において、歴史的視座から社会構造を分析するという方法は、以前のような支持を集めてはいない。実際、「歴史」的アプローチに以前と同様の意味を求めることは困難だろう。その代表的存在であるクリーヴィッジ論もまた、もはや政治を規定する集団を指摘することはできないのかもしれない。しかし、こうした理論は依然として多くの示唆を与えてくれるだろう。クリーヴィッジ論をはじめとする「歴史」的アプローチの理論は、その意味を変え、現代政治の背景をなす社会構造や政治文化に存在する確かな「歴史」の存在を示しているのである。

多くの先進諸国は第二次世界大戦後、広く共通点を持つ社会変化を経験した。しかし、そこに現れた政治的形態は一つの一般形に収まるものではない。様々な歴史の上に構築され、ゆえに多様な構造を持つ各国の社会と、こうした一般的な変化との反応の結果として、それぞれに異なる政党政治の形態が現れるのではないだろうか。現代の国家は、押し寄せる国際統合の潮流や、進行する環境破壊に対し、様々な決断を迫られているが、しかしここで、各国の取る方針は、その国の歴史的経験を一因として形成された社会的構造や文化的性質に様々な面で制限を受けるのである。こうしたことから、国際的に進展する様々な局面での社会情勢の深化により、複雑さと緊張を増す世界の中で、かつてロッキンらが行ったように、多様性を地政学的な一般枠組みに統合していくことは、今後さらに重要な課題となっていくだろう。

今日の社会は、時に前近代、さらには近代を越えたものとして、「歴史」から切り離され語られることがあるしばしばある。しかし「歴史」的アプローチは、このような現代においてなお、各国の社会が連続的な歴史の文脈上にあり、その影響を確かに受け続けているということ明確に示しているといえよう。

参 考 文 献

<日本語文献>

- イングルハート、R. (三宅一郎 他訳) 『静かなる革命：政治意識と行動様式の変化』 東洋経済新報社、1978年。
- (村山皓 他訳) 『カルチャーシフトと政治変動』、東洋経済新報社、1993年。
- 小野耕二 『転換期の政治変容』 日本評論社、2000年。
- 河田潤一 『比較政治と政治文化』 ミネルヴァ書房、1988年。
- 篠原一 『ヨーロッパの政治：歴史政治学試論』 東京大学出版会、1986年。
- 『歴史政治学とデモクラシー』 岩波書店、2007年。
- 白鳥浩 「ヨーロッパにおける現代政治学の形成—シュタイン・ロッカンの理論を中心に—」 『法政研究』 第5巻1号、1999年。
- 『市民・選挙・政党・国家：シュタイン・ロッカンの政治理論』 東海大学出版会、2002年。
- 「新しい『ローマ帝国』としての欧州連合：シュタイン・ロッカンの理論 的示唆」 『社会志林』 第51巻1号、2004年。
- 「戦後沖縄における参議院選挙の研究—選挙データによる地方政治の自律性の検証—」 『社会志林』 第50巻第3号、2004年。
- 西川知一 編 『比較政治の分析枠組』 ミネルヴァ書房、1986年。
- フローラ、P. (竹岡敬温監訳) 『ヨーロッパ歴史統計国家・経済・社会：1815-1975 (上巻)』、原書房、1985年。
- ベック、U. 他 (松尾精文 他訳) 『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理—』 而立書房、1997年。
- の場敏博 『現代政党システムの変容：90年代における危機の深化』 有斐閣、2003年。
- レイプハルト、A. (内山秀夫 訳) 『多元社会のデモクラシー』 三一書房、1979年。

<外国語文献>

- Budge, I., et.al., Mapping policy preferences: estimates for parties, electors, and governments, 1945-1998., Oxford, University Press, 2001.
- Flora, P., et.al. eds., State formation, nation-building, and mass politics in Europe: the theory of Stein Rokkan, based on his collected works., Oxford, Oxford University Press., 1999.
- Hirschman, A., Exit, voice, and loyalty : responses to decline in firms, organizations, and states, Harvard University Press, 1970
- Kitschelt, H. , The transformation of European social democracy, Cambridge, Cambridge University Press, 1994.
- ed., The radical right in Western Europe: a comparative analysis, Ann Arbor, University of Michigan, 1995.
- Klingemann, H., et. al., Mapping policy preferences II : estimates for parties, electors, and

governments in Eastern Europe, European Union, and OECD 1990-2003. Oxford, Oxford University Press, 2006.

Lipset, S.M. and S. Rokkan “Cleavage Structures, Party Systems, and Voter Alignments: An Introduction” in Lipset, S.M. and S. Rokkan eds., *Party systems and voter alignments: cross-national perspectives*, New York, Free Press, 1967.

Rokkan, S., “Cities, States, and Nations: A Dimensional Model for the Study of Contrasts in Development” in S. Eisenstadt and S. Rokkan ed., *Building States and Nations: Vol.1 Models and Data Resources*, Sage Publications, 1973.

——— “Entries, voices, exits : Towards a possible generalization of the Hirschman model” *Social Science Information* Vol.13, No.1, 1974

——— “Dimensions of State Formation and Nation-Building: A Possible Paradigm for Research on Variations within Europe” in C. Tilly, ed., *The Formation of National States in WesternEurope*, Princeton, Princeton University Press, 1975.

謝辞

本稿執筆にあたり、適切な指導、有益な助言をしていただいた、指導教官の木村幹教授をはじめ、助教の田中悟先生、木村ゼミの各位に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

Political Theories of Stein Rokkan in Current Party Politics: European Integration and Ecology

Koichi SUGIMURA

Abstract

With economic development and information technology advancement, the post-War European society has changed from a historical to temporal society. While the former is based on traditional groupings, the latter is based on individual actors. As a result, the idea of explaining the society from the perspective of history has declined, and at the same time explanations based on individual values and behaviors through the use of quantity data have become more popular approaches. However, against this background, does history really have no meaning in explaining the contemporary society? Are people in today's society really free from history and social structures?

Stein Rokkan is one of the leading scholars of the historical approach. Notably, his political theory on party politics has lost supporters along the above-mentioned academic trend. To evaluate the historical approach, this paper investigates the meaning of his theories in the context of present-day politics by analyzing the European integration and the ecology, both which figure a lot in the discussion of current party politics.